

「万国」と「新」の意味を問いかける

——清末国学におけるエスペラント（万国新語）論——

林 義 強

エスペラント (Esperanto) は、民間人によって人為的に作ったものとして、言語史においてはきわめて珍しく、新しい言語といえる。清末では、それが「万国新語」と訳され、一部の知識人の間に流行っており、中国における共通語を中国語からエスペラントに変えるべきであるという主張まで現れていた。

中国人におけるエスペラントへの接近については、清末の在日中国人と明治時代の日本人との交流に遡って見ることが出来る。一九〇六年、二葉亭四迷が日本最初のエスペラント独習書『世界語』を出版した。この「世界語」という日本語の訳語は、中国語においてもエスペラントの訳語として今日まで使われてきたが、当時では「万国新語」と呼ぶのが一般的である。この訳語にある「万国」と「新」という二つの言葉は、当時多くの知識人を誘惑したにちがいない。「万国」と「新」は、新しい時代と世界に向かって開く開放感、世界共通のスタンダードがもたらす平等の恩恵に対する期待感、中国伝統の世界主義傾向、そして閉鎖な状況から斬新さを求める心理を一斉に満たす可能性を潜む時代のキーワードともいえよう。とくに、アナキズムと欧化を主張する人にとって、それは新天地へ直通するエスカレーターのようなものであり、西洋と速やかに合流できる道でもある。近代中国人の視野に突如と現れてきたこ

「万国」と「新」の意味を問いかける

の言語はまもなく、中国文化の再建に関する多くの議論において特異な存在となっていた。

清末の在日中国人は最初、日本人との会話を疎通できる機能を、 에스ペラントに期待していた。中国語と日本語との間には、同じく漢字を使っているとはいえ、実際の会話では意志の疎通が不可能であることに、当時多くの人が悩んでいた。 에스ペラントの出現は、それを克服し、新たなコミュニケーションの道具を提供しうるため、はじめから歓迎されていた。⁽¹⁾ 実際には、 에스ペラントが当時の日中コミュニケーションにどれほどの役割を果たしたかについて、その詳細は究明されていないところが多い。しかし、 에스ペラントはコミュニケーションの道具というより、世界万国の言語統一という点で示唆と可能性に富んだ言語として注目されていたといえる。当時のアナキストと社会主義者の多くは、国境を越え、世界を一つにする可能性を備えたものに対して、違和感を抱くことが少なかった。それも、社会主義講習会という組織において、 에스ペラントが最も盛んに議論されたことを説明できる理由である。 에스ペラントがその訳語の文字通りに、将来の万国共通の「世界語」になることを、彼らは夢見ていた。その夢のために、中国語を廃絶して 에스ペラントによって取り替えるうという案はまもなく提起しはじめられた。

清末国学は、文化における言語の存在を最重要視した主張で知られている。言語は歴史と並んで、国学の最重要な構成として位置づけられており、一つの文化、国家あるいは民族を他のそれから区別できる最も根本な要素であると考えられていた。そのため、清末国学に語られる文化、国家あるいは民族はまず、言語共同体として見ることができ。章炳麟は「今は、種族の分合、必ずやその言語の異同によって分類する」という結論がある。⁽²⁾ 言語は民族の絶対的な特徴であり、その異同は民族を識別する際の最も重要な判断基準である。その理由について、彼は、「それぞれの言語にはそれぞれの国性を含んでからその名を成した」と指摘したことがある。⁽³⁾ ここでの「国性」

とは、一国の特徴や性質であり、そして、その文化アイデンティティの根源になりうるものである。その「国性」の相違によってそれぞれの言語が異なる様相となっていているわけである。その認識の下で、言語は民族と文化とともに繁栄し、ともに衰退するものとなり、言語を守ることはすなわち「国性」を守ることとなる。それは章炳麟が『尙書』以降、力説し続けた一大論点であり、清末国学が背負おうとした使命でもある。『国粹学报』の中心人物である鄧実は「鷄鳴風雨樓獨立書・言語文字獨立」において、「保国保種」という課題における決定的な地位も言語に与えた。彼はそこで、「言語文字は、国家と民族の広い護城河であり、保国保種の金城湯池である」と指摘し、言語が民族と文化を区別する最大の要素であり、民族と文化を保護する絶大な武器であると見ていた。⁽⁴⁾言語の異同によって共同体文化、国家あるいは民族の独立と存続を求めるには、言語文字の独立と存続が絶対的な大前提であると主張した。言語が共同体の結成原理そのものであり、文化の境界を画定し、文化を形成し、そして、文化と同じ運命にあるというのは、清末国学の共通認識といえる。

このような主張の持ち主として、エスペラントについては、最初の語学習得の段階では、清末国学論者の中でも、多くの人は好意的であり、真剣に勉強に取り組んでいた人もいたが、問題は中国語廃棄、エスペラント採用、世界言語統一という主張が現れてから始まった。

清末のエスペラント論争は、これまでまったく接点のない外来言語をめぐる、中国の言語問題を議論し、しかも、その多くは中国ではなく、日本とフランスの間に行われていたという奇妙な構図である。

まず、日本側の清末国学論者グループを見る場合、劉師培はエスペラントに最も熱心な人であると指摘できる。

「万国」と「新」の意味を問いかける

日本滞在期間中、急速にアナキズムに傾倒していた劉師培は、エスペラントを共産制と並び、世界平等と統一において最も必要なものと考えていた。アナキズムが実現される将来の世界において、エスペラントは万国公認の統一言語として採用されるのであろう、と彼は予想していた。その将来に備えるために、彼はエスペラント教育を提唱したのである。その最大の理由として挙げられたのは、次のようなことである。

中国の人が本国の言語に習熟しようとするなら、まず官話を学ばなければならない。また、外国の言語を会得しようと思うなら、まずエスペラントを学ばなければならない。⁽⁵⁾

ここでは、中国における「官話」の位置づけと同じように、エスペラントは世界の「官話」として位置づけられている。それは清末におけるエスペラント認識の一つの典型といえる。実際、エスペラントが生まれた西洋においても、それが「官話」となったこともなければ、当時ではそれが「官話」となれる勢いと状況でもなかった。にもかかわらず、近現代中国の多くのエスペラント論者において、それはあたかも、諸言語の間に架け橋のような存在でありながら、既存の諸言語を超えた世界標準語として認識されていた。それは誤解というよりも、「万国共通」というもののへの憧れと世界主義への情熱から生まれた「世界官話」への想像と見るべきであろう。

「世界官話」である以上、すべての外国語に優先して習得すべきであるということは、当然な主張となる。劉師培はエスペラントが中国人にとって、最も馴染みやすい言語であろう、と指摘し、読者に習得の勇気をつけようとした。例えば、fero (鉄) + vojo (路) ≡ fervojo (鐵路) となるように、言葉の構成と生成が中国語と類似した点が多く見出だすことができる。その文法も極めて簡潔にできており、中国語の構造と似たところもあり、中国人にとって他の異言語より学びやすいだろう、と彼は見ていた。そのエスペラント教育のために、教師養成と書籍出版が急務とな

り、既存の学校において 에스ペラントを必修科目にすることは求められていた。

ここで劉師培の論点を最初に論じておいたのは、それが清末国学論者の中で、エスペラント採用論に最も近いものだからである。劉師培にとって、エスペラントは最新の言語であり、言語自体は優れており、中国語に対しても、ほかの外国語に対しても超越した立場にあるため、世界中の人々に支持されている言語である。それは万国共通の言語になりうる、いいえ、むしろそれを万国共通の言語にすべきであろう、と考えられていた。

しかし、中国語を廃絶して、それに取り替える新言語として、エスペラントを直ちに中国の通用語にすべきだという意見に、劉師培はアナキストでありながら、賛成を表明しなかった。「世界官話」とはいえ、劉師培の中で、それはまだあくまでも一種の外国語である。そして、中国国内での「官話」の普及さえがなかなか進まない中、異言語のエスペラントの普及については、それ以上の困難が予想されていた。無政府、無国家の将来が想定されつつも、現段階での中国語廃棄という主張には、国学論者としての彼にはかなりの抵抗感があった。この時期の劉師培は、国学論を堅持しながら、アナキズム色が急速に強まった段階にあっただけに、ナショナリズムとアナキズムは平行していたが、両者の間には緊張関係があった。その挟間で、彼の言論の軸心が揺れはじめた。しかし、エスペラント採用はあくまでも遠い将来への一つの展望であり、それを現実における実現の可能性と混同せずに、当面は中国語を外国語としてのエスペラントより優先する位置におくべきである。それこそは、劉師培の論点の帰結である。そこでは、自文化を堅持する国学論の立場が終始崩れていなかったのである。

清末におけるエスペラントの提唱者として、最も知られる過激派は『新世紀』グループである。呉稚暉、李石曾、褚民誼をはじめとしたパリの『新世紀』雑誌の同人は、中国語を廃絶してエスペラントを共通語にすべきであると提

「万国」と「新」の意味を問いかける

唱した。彼らは、象形文字を野蛮人のもの、表音文字を文明人のものと見なし、漢字が文明進化に遅れたものであると断じた。さらに、中国語の文法は複雑で、規則もなく、表音文字のように文字の形から読むことができないといったような多くの難点が指摘された。呉稚暉は、このような中国語が祖先からの汚い遺産であり、「旧種性」と野蛮性の体現である、と極論し、このような進化を阻むものを淘汰しなければ、中国は永遠に野蛮の状態から脱出できない、と糾弾した。中国語から 에스ペラントに乗り換えることは、進化の原理に従った選択であり、エスペラント提唱論者の一人篤信子が喩えたように、それが「敗絮を脱いで輕裘を着る」ような愉快な転換であろう、と礼賛されていた。章炳麟は真正面からその主張を撃破しようとした。一九〇八年、「駁中国用万国新語説」が発表され、エスペラント採用論に対して批判を展開した。それにすぐに反応して、『新世紀』は第五七号に反論文「書駁中国用万国新語説後」を掲載した。それを受けて、章炳麟は「規『新世紀』」で再反論した。一九〇九年、章は「エスペラントが上海に流行しており、隠れた危害が甚しい深い」と危惧し、エスペラントのことを議論した手紙を「与人書」と題して公表し、自らの反対論を度重ねて披瀝した。それらはいずれも日本で書かれたものであり、この激しい論戦は、日本とフランスの間に応酬されていたのである。

清末 에스ペラント論争においては、章炳麟をはじめとした国学論者の反論は、三つの軸から整理して検討することができる。それはつまり、進化論、コミュニケーション論、国粹論あるいは国性論という三つである。以下は、それについて逐一分析していく。

進化論は『新世紀』グループのエスペラント論において、最大の理論根拠といえる。李石曾は文字が生物と同じく、進化論が適用できるものと考えていた。⁽⁶⁾ その進化過程において、「象形」よりも「表意」、「表意」よりも「合声」が

進んだものであり、前者が後者によって取り替えることが「文字革命」と呼ばれていた。とくに、近代印刷技術には「西洋の文字だけが使える」、中国語が機械印刷に不適だとみなされていた。李石曾にとって、それは近代機械文明によって付けられた言語の優勝劣敗であろう。呉稚暉と篤信子はより過激な語調で、「中国文字が野蛮であり、欧州文字がそれより良く、万国新語は欧州文字のまだ完全でないところを淘汰して除去したものととして、それらよりさらに良い」と語り、中国語と「万国新語」に、それぞれ「野蛮」と「文明」のラベルを貼り付けて、それによって自らの進化論によるエスペラント論に決定的な理論的根拠を与えようとした。⁽⁷⁾

清末国学論者の進化論に対する立場は一枚岩ではないが、中国語を進化の過程において「遅れたもの」あるいは「劣敗」するものとして位置づけることに反対するところにおいては、きわめて一致していた。とくに、象形文字といわれる中国語と表音文字としての西洋諸言語が、野蛮と文明という分別で判断されることは、清末国学論者から見れば、全くの暴論といえる。進化論に対して最も論理的批判を展開した章炳麟のエスペラント論は、その意味で清末国学の立場を最も鮮明的に代弁したといえる。⁽⁸⁾

章炳麟はまず、エスペラントが新しいものだから、西洋人が発明して支持しているからといって追随する現象を「欧化」に対する盲信である、と捉えていた。⁽⁹⁾ 南はマレーシアから、北はモンゴルまでの表音文字の諸国が、中国より文化が優れていないと章炳麟は見ており、それを有力な事実として挙げて、表音文字が進化した文化であるという李石曾らの判断を糾した。一方、表音文字を使っているロシアの識字率が中国より低いという現状を反面の例としてあげ、文化の普及は、文字の難易というより、むしろ教育によるものである、と主張した。それゆえ、進化論によって西洋文字が中国文字より進んでいるという見方は、そもそも誤っていた進化論による事実無根な推論にすぎず、言

「万国」と「新」の意味を問いかける

語の比較研究において、こうした進化論は採用すべきではない。すでに、進化論批判の専論を発表した章炳麟は、ここで理論的ではなく、主に事例に即して言語進化論を斥けようとしていた。章炳麟は言語の比較研究に進化論を適用させることを反対しただけではなく、進化論そのものを痛烈に批判し、『新世紀』側が主張した「野蛮な中国語は必ず文明な 에스ペラント によって取り替える」という言語の「優勝劣敗」論を根底から非難した。

そのように表音文字の「進化」を否認した後、章炳麟はさらに、中国の独自の歴史と現状が西洋の表音文字ではなく、むしろ漢字を必要としている、と主張した。

(中国語は) 今、六書を以って貫通し、各字はそれぞれの部に帰している。たとえ極北の漁陽や極南の儋耳で、発音が分かりにくくても、字に案ずれば理解できる。これは中国語の便利さである。海西諸国は領域が狭く、会話がとりやすく、表音文字を用いても障害にならない。インドに至ると、地が大きく物が博ろく、中国とほぼ等しい。その言語は七十種あまりに分けているにもかかわらず、文字はいまだに表音文字の律を守っている。地域から数武を出たら、もう文書が不通となる。梵文は荒廢し、千年もまだ経ていないが、随俗の学人の多くはすでに梵文を理解できない。そのため、古史が荒廢して曖昧となり、各地域の風俗が異なっている。こう見れば、表音文字は小国に適するが、大国の俗に利くものではないことは明らかである。⁽¹⁰⁾

これは『国故論衡』において表明した論点であるが、「駁中国用万国新語説」にもほぼ同様な考えが示されている。その論点から見れば、『国故論衡』の言語論は 에스ペラント 論争を念頭において書かれた一面が窺える。それによれば、広い中国では、発音の相違はどうしても存在するが、漢字の構成原理は地域の差を超えて文字の通用性と歴史の伝承を保ってきた。表音文字は、ヨーロッパ諸国のような小国においては有効であるが、中国のような広い国には混

乱をもたらすにちがいない。中国とほぼ同じ広さを持つ印度では、表音文字を使っているが、地域と地域の間、現代と古典の間に、大きな隔たりが存在し、言語における地域の差異と時代の差異は解消できずにおり、そのせいで、その古代歴史はいまだに明らかにすることが難しい。それは表音文字が文化の統一と存続を妨害した証明である、と章炳麟は見ていた。

中国語を「万国新語」に変えて、表音文字へ進化すべきという主張について、エスペラント論者が挙げた理由の一つは、中国語の地域差異が大きく、通訳なしに会話もできないというコミュニケーション上の不便である。李石曾は「文字が重んじるものは、ただ便利のみである。ゆえに、それが便利かどうかによって、そのレベルの高低を定めるべきである」と主張し、地域間のコミュニケーションに不便な中国語をレベル低い言語と位置づけた。そして、その言語の複雑さがゆえに、習得が難しく、教育においてもきわめて不便である。⁽¹¹⁾『新世紀』グループはその二つの不便さを大きな問題としており、コミュニケーション論から中国語の廃絶を主張したのである。

それに対して、章炳麟らの反論はまず、広い中国において、漢字がエスペラントのような表音文字よりも、地域差異を超えたコミュニケーションに優れており、複雑な言語こそ熟成した良い言語である、という中国語擁護論である。章炳麟によれば、エスペラントはヨーロッパ言語を素地に作ったものであり、ヨーロッパ諸国においてはコミュニケーションに役に立つかもしれないが、「万国新語」ではなく、せいぜい「欧州新語」にすぎず、「万国共通の言語」になることはありえない。コミュニケーションの利便性を理由にエスペラントを提唱するならば、それは「万国新語」ではなく、単なる「外交新語」にすぎない、とは章炳麟の揶揄である。そうであれば、「万国新語」ではなく、まず欧州において「欧州新語」として実践し、そこで成功できれば、「亞洲新語」も考えるのはよいかもしれない、と半分

「万国」と「新」の意味を問いかける

冗談の語調で語った。コミュニケーションの向上のためなら、章炳麟は 에스ペラントにも評価できる点があると認めていた。しかし、万国共通のコミュニケーションを図ろうとすれば、使用地域がはるかに広くて、使用人口が圧倒的に多いアジアの言語をむしろ優先的に考えるべきであろう。章炳麟はこうして皮肉も混じって 에스ペラントの優位性を否定した。

そして、国内においては、中国語によって支えてきた文化が存在しており、中国語によるコミュニケーションと歴史伝承が数千年も維持してきた実績がある。章炳麟はそれを高く評価し、広い中国の国内においては、漢字こそ、文字によるコミュニケーションに優れており、意思の疎通と言語の統一を図ろうとすれば、 에스ペラントよりも、中国語によった方が容易である、と反論した。ヨーロッパ諸国の人々にとって、 에스ペラントが元の母語に近いから、学ぶのは容易であるが、中国人にとって、語順、発音、物事の命名が異なり、それを 에스ペラントに合わせるために、すべてを強行に変えることができない。 에스ペラントは外国とのコミュニケーションに役に立つかもしれないが、外国とのコミュニケーションよりも国内のコミュニケーションを優先的に考えるべきである。その論考を経て、章炳麟は中国語を 에스ペラントに対しても絶対的な優位に置いたのである。

言語は簡単なものから複雑なものへと発展していくという論点は章炳麟の早年から持論の一つである。¹²⁾ それによれば、中国語は複雑がゆえに不便というよりも、むしろ複雑がゆえに優れたものと考えらるべきであろう。その複雑さは、角度を変えれば、言語の豊かさともいえるし、長い歴史の中で蓄積してきた知恵でもある。そのため、章炳麟は 에스ペラント採用論者が言語の優劣を知らず、自分の優れたものを捨てて他人の粗末なものを拾おうとして、「時に趨る者は、盲目にして歩いて行き、文明を追おうとしているが、往々にしてその最も野蛮なものを得ている」と批判し、

彼らを知りなものと決め付けたのである。⁽¹³⁾

清末国学はより純粹な中国語を復活させて、それを標準語として地域間の差異を解消し、中国語を統一させることを目指していた。それは 에스ペラント による中国語統一よりはるかに現実的で、実行可能なことであると考えられていた。章炳麟をはじめとした多くの国学論者は方言研究を通じて、各地の方言が「古音」という根底のところにおいて互いに通じ合っていることを発見し、方言を中国語を混乱させるものではなく、中国語のルーツの一部を温存しているものとして高く評価したのである。そのルーツから本来の中国語を回復し、さらに教育普及と言語研究を遂行することによって、中国語における地域差異は解消できる、と信じられていた。

ここまで来て、 에스ペラント がその訳名が示した通りの「万国共通」と「斬新かつ先進」というイメージは転覆された。章炳麟にとって、 에스ペラント は新しい言語ではあるが、新しさがゆえにより進化したものでなければ、中国語より優れたものでもなく、到底、万国共通の統一言語になることがありえない。中国には中国語によってコミュニケーションの利便性を向上させる独自の道がある。

そもそも、清末国学論において、言語は単なるコミュニケーションの道具ではなく、それをはるかに超えた役割が期待されていたのである。あらゆる言語はコミュニケーションということだけを目的としているのではなく、そこには「国性」と歴史が存在しているという認識は、清末の国学論者の中で誰一人も異論なしに一致していた。清末国学の言語論は上にすでに要約して述べたが、実際はその言語論だけでも、 에스ペラント 採用論を退けるに十分な立場を提供できると考えられる。その国粹論あるいは国性論のみでも、中国語廃絶を反対する論点を直接に推論できるものといえる。「国性」を無視した言語普及ないし変更は、侵略と植民によってしか実行できない、と章炳麟は論じた。

「万国」と「新」の意味を問いかける

言語を切り替えると、その中に含まれている「国性」というものも当然消えて、その国と相容れないものへと変えざるをえない。それは結果的に、文化、国家、民族の消失につながっていくのであろうと危惧されていた。

民族の区別は、言語を除けば、現すことができない。……冠帯の民でありながら、雅素を廃棄し、輝く文史学術をすべて抑えて他族に従う。皮膚が存在しなければ、毛はどこに付着するのであろう？……言語文字が亡びたら、性情節族も滅び、九服が崩壊し分裂し、長く召し使いとなる。⁽¹⁴⁾

章炳麟はここで、言語文字を皮膚と喩えた。言語は民族の存在を現前し、証明するものであり、人間の肉体で言えば皮膚のようなものである。その皮膚が存在しなければ、もともとそれによって育ててきて、そしてそれによって表している民族のあらゆる属性も成り立たなくなる。自ら優れた「文史学術」を棄てれば、外来の言語の下では「召し使い」の文化しか築くことができない。言語の喪失は必ず、言語共同体としての民族、国家、文化の崩壊を招くこととなる。エスペラント採用はそのような事態を自ら招こうとするようにも見られていた。章炳麟は、かつて日本の国粹主義者が批判した欧化の風潮が、いまや中国にも勢いを増していると見て、「今の中国はどこどころ西洋を真似て、一語も自力で建てない。それは日本人と同じ間違いだ」と指摘した。⁽¹⁵⁾ そのような現状に対して、彼はロシアがポーランドに対して、ポーランド語を禁じてロシア語の使用を命じた歴史を提起し、言語を廃棄させることよって侵略と殖民を行うことを「滅国新法」と名付けた。中国語を自ら放棄し、他の言語を採用するのはまさにそのような「滅国新法」の真似であり、しかもそれが自ら進んで民族と文化の崩壊を招くことであらう、と章炳麟は警告する。

彼らは万国新語を以って国文を殲滅しようとするのはまさにそうである。まして、功利の心を抱き、繁華を羨み、その願望が及ばない度に、軒轅厲山が黄色人種であるという出自の背景が、自分を豚小屋にまで降ろし、西

洋の白人文明の俗に脱化できないことを悔やみ、中国を遠く西の藩地にしようとしたのはもう久しい。そのため、彼らは、その文字と言語を廃絶しようとし、歴史が火の種を撒き散らせずに自動的に断絶し、この民が国家民族を感懐する心を無くせばまた宜しい（と思つてゐる）⁽¹⁶⁾。

エスペラント提唱論はその意味で、国学にとってまさに最悪の敵といえる。中国語が消えれば、中国の歴史も存続できようもなく、そして、歴史と言語とも消えれば、中国文化は消滅していくしかない。それを西洋文明への生まれ変わりの代償として、エスペラン提唱者たちは堂々として主張していたが、章炳麟はその主張に対して怒りを覚えた。その怒りの表現と語り口は、上に例挙げた諸論文に随所に見られる。

『新世紀』が提案したエスペラントに近寄せるために中国語を改造する妥協案に対しても、章炳麟は拒否した態度を見せた。エスペラントが現在において直ちに採用できない現状であれば、中国語を表音文字へと接近させるように改造を加えた上で、その存在を一時的に認めてもよい、というのはその提案である。具体的には、例えば中国語の語順をエスペラント風に調整し、エスペラントの文法に対応して、中国語にも複数格の「門」や助詞の「的」などを新規に規定し、さらに日本語のように漢字の数を制限し、表音文字に近づけるような新しい文字体系を開発すべきというものである。⁽¹⁷⁾しかし、章炳麟をはじめとした清末国学の言語論の立場は、あくまでも「より純粹的な古き良き」中国語を回復することにあり、歴史から切断してエスペラントの変種とするような言語改革は認められるものではない。章炳麟はとくに言語の歴史を重要視し、歴史へのつながりを絶えずに維持できる言語を評価していた。エスペラントによって中国語を改造することとなれば、中国語はエスペラントとの対応性が高めるのであろうが、今度は逆に、中国の歴史上の書籍を読むには対応できなくなってしまう。古書を正しく読めるにはそれに相応しい言語が必要であり、

「万国」と「新」の意味を問いかける

中国にはそれが古い中国語ほど効果的であり、より価値のあるものとなる。

今、恣意に変更し混乱させれば、万国新語を訳すには易しくなるが、旧有の典籍を読むには難しくなる。凡そ各種史伝文辞、それまで読んで理解できるものは、今度隔たりが増える。言語の用は、他国の言語を翻訳するのを急務とするか、それとも自国の過去に有った書籍を読解するのを急務とするか？⁽¹⁸⁾

その反問は、言語について、歴史へのつながりが他国へのつながりより優先すべきという原則から発したものである。言語はまず、自国の「史伝文辞」を読むことを第一次的課題とすべきであり、それを他の言語への翻訳上の利便性のために改造するのは、言語の主体性と歴史性に反するものである。自国の歴史に根差しもない言語は、歴史とともに、民族と文化のアイデンティティの根源となりえない。エスペラント採用案も、エスペラントによる中国語の改造案も、その意味において考える余地のない選択肢であると一蹴された。

それに比べて、劉師培の議論は受身側からの反論というより、建設的な提案で積極的に攻める姿勢とも受け止められる。劉師培は人類の古代社会を研究するには、その古い時代に出来た漢字を手係りとして分析するのを有効な方法として勧めた。例えば、「畜」と「蓄」、「積」と「私」といった字を通じて、私有制が農牧業の成立後に確立した制度であると推論できる。また、「父」と「君」との二文字の象形を分析すれば、国家が家族から起源するという近代社会学の説を証明できる。こうした漢字によって人類文明を原始状態から考察できるといふ点は、表音文字にない長所であり、中国語が世界に貢献できる利点である、と劉師培は主張した。中国語の歴史と現状から見れば、表音文字は混乱と困難をもたらすばかりであり、それとは対照的に、象形文字は中国文化の原点と本来の姿がその象形を通じて太古の昔から今日までに伝えることができ、歴史伝承に優れている。そのため、「中国文字の貴は、象形文字にこ

そ在る」と彼は反論した。アナキズムの立場から 에스ペラントに好感的な劉師培は、新世紀グループの主張とは反対に、エスペラントの力を借りて中国語を世界に広げようと呼びかけるようになった。彼は、『説文解字』を 에스ペラントに翻訳すれば、世界から注目を浴びることとなり、そして、漢字を解読することによって、古代社会学の研究に貴重な資料を提供できるのであろう、と展望していた⁽¹⁹⁾。

清末における 에스ペラント論争は、上述の三つの軸からここまで分析してきたが、その三つのいずれにおいても、論争の核心は 에스ペラントではなく、中国語となっていたのである。実際、論争双方とも 에스ペラントについての造詣がそれほど高いものではなく、むしろ初学者レベルのすぎないといってはよい。論争自体もすべて中国語によるものであり、エスペラント提唱者でさえ、当時は 에스ペラントによる著述の実績もなく、エスペラントをめぐる論争の応酬は、すべて抽象的な理論と発想によって建てられたいくつかの簡単な論点にすぎなかった。論争双方の実際の関心は、むしろ中国語自身にあり、具体的な議論と努力は結局、それに集中していたのである。この論争に刺激されて、清末国学側は中国語批判に反論するためにも、自らの言語研究と言語思想を深めようと努力し、言語普及のための方法論を積極的に検討し、方言から中国語のルーツを探るといふ研究も含み、いわゆる「より純粋な古き良き」中国語を再建することにより大きな力を注ぐようになったのである。

こうした清末国学論者側の努力が実った最大のものは、エスペラント論争に刺激されて開発した漢字注音方法である。エスペラントと比較して、中国語の音声表記には改善すべきところが多くあるという点を、章炳麟も劉師培も認めており、従来の注音方法である反切の有効性に限界を感じた。それに取り替える新しい漢字注音方法はそのために開発されたのである。見逃すことができないのは、それがはじめて公表されたのが、方言研究の論著でなければ古音

「万国」と「新」の意味を問いかける

研究の論著でもなく、エスペラント論争のために書かれた「駁中国用万国新語説」の中にあるということである。エスペラント採用論者は、西洋の表音文字を高く評価し、簡単な記号の組み合わせで文字が読める言語がより高度な文明であると繰り返し返って強調し、エスペラント採用前のつなぎとして、表音文字による中国語改造を提案していたが、章炳麟の漢字注音法はまさに、簡単な記号の組み合わせによって漢字の読み方を表すものである。その意味では、漢字注音方法には、論敵の見解の一部を消化した形として現れた一面がある。エスペラント論争は清末国学の言語論と言語研究によい刺激をもたらした結果となった。

その新しい漢字注音方法を開発した章炳麟は、それに先立て、古音の音韻学研究を通じて、「二十三部音準」、「韻目表」と「紐目表」を作成し、古音の子音を二三部と分類し、各部の音値を画定した。その後さらに、「娘」と「日」という二部を研究した結果、「泥」部に併合できるため、古音の子音が二一部ある、と確定した。⁽²⁰⁾新しい漢字注音方法は、その研究を基礎にして、現在の方言を考察した上で開発した独創な方法である。章炳麟は、籀や篆の書体から五八の偏旁を取り出し、さらに簡約した形で、「紐文(子音)三十六」と「韻文(母音)二十二」に分け、その組み合わせによって漢字の発音を表せる。その表音記号の発想は日本語の仮名と類似したものである。開発者の章炳麟が当時日本にいたことを考えると、仮名によって漢字の発音を表わすという日本語の注音方法から示唆を受けた可能性が十分にある。その後、『国故論衡』などにおいて、この注音方法はさらに改善され、エスペラントの長所を参照しながら、利便性と正確性においても従来の反切法を大幅に超えた新しい音声表記法となった。章炳麟はエスペラント採用論者の見解の一部を消化しながらも、それは西洋文字ではなく、あくまでも漢字、しかも古い漢字書体の一部を注音の元素として採用し、中国語の歴史および自身の言語研究に根付いた漢字注音システムを完成したのである。

清末以降、エスペラントをめぐる論争が再び起きたのは、五四時期のことである。白話や方言とともに、言語問題はその時代の思想文化において、大きなテーマの一つとして再び注目を浴びた。そこに行なわれていた議論は、清末において詰め切れていないところを展開したところもあれば、清末のその論争が再登場したように見えるところも少なくない。清末エスペラント論争に現れていた議論は、その後の中国語改革の方向に大きな影響を与えており、今日までの中国語においてそれを多く見出すことができる。面白いことに、現在の台湾至る中華民国では、章炳麟が開発した漢字注音システムが使われているが、大陸の中華人民共和国はその反対側の論点、つまり表音文字を方向とする『新世紀』グループの中国語改革論に近い立場を公式的に認めており、ラテン文字によって漢字を注音するシステムを採用している。

1 章炳麟と劉師培などが参加した社会主義講習会では、日中両国語による交流の困難と、そのためのエスペラントの必要性が、幸徳秋水や張継の講演で繰り返して提起された。幸徳秋水は第1回の講習会での「アナキズムの起源、及びその社会主義との違い」という講演で、張継は第7回の講習会での「無政府党本部の状況、及びエスペラント教育の提案」という講演でそれを言及した。一九〇八年四月から、大杉栄らを講師に招き、劉師培の自宅でエスペラント講習会が週三回のペースで開かれ、二〇名ほどの参加者がいた。『天義』、『衡報』など二部の雑誌には、エスペラント関連の論述、記事、紹介及び書籍や講習会の広報記事が頻繁に出るようになった。日本の公安当局が残した、このメンバーたちについての秘密報告にも、「張継、劉光漢等ト本邦社会主義者ノ間、互ニ言語ノ通用充分ナラザルヨリ、微細ノ研究解釈ヲ試ミルヲ得ズ、之レガ為メ更ニ進捗セザルヲ嘆ゼリ」とある。大杉栄は社会主義講習会のメンバーでもある。入獄のたびに一つの外国語を習得しようという、いわゆる「一犯一語」のつもりで、一九〇六年三月からの獄中生活で通信教育を通じてエスペラントを習得していた。この年の六月以降は、

「万国」と「新」の意味を問いかける

大杉栄が赤旗事件で再び逮捕され、千布利雄が代講した。嵯峨隆『近代中国アナキズムの研究』（研文出版一九九四年）、同氏『近代中国の革命幻影——劉師培の思想と生涯』（研文出版一九九六年）、路哲『中国無政府主義史稿』（福建人民出版社一九九〇年）など参照。

- 2 章炳麟「方言」、上海人民出版社編『章太炎全集』第三集、第二〇四頁、上海人民出版社一九八四年。
- 3 章炳麟「東京留学生歡迎会演説辞」、『民報』第六号（一九〇六年七月二五日）、湯志鈞編『章太炎政論選集』上冊第二六九頁、北京：中華書局一九七七年。
- 4 鄧実「鷄鳴風雨樓獨立書・言語文字獨立」、『政芸通報』一九〇三年第二三三号。
- 5 劉師培「ESPERANTO 詞例通釈総序」、日本語訳は前掲嵯峨隆『近代中国の革命幻影——劉師培の思想と生涯』による。
- 6 李石曾（署名は「真」）「進化と革命」、『新世紀』第二〇号（一九〇七年一月二日）第一頁。
- 7 吳稚暉（署名は「燃」）「新語問題之雜答」、『新世紀』第四四号（一九〇八年四月二五日）第二一三頁。ここは、吳稚暉が篤信子の論点を引用し、それに賛成の意を表したところであるため、二人の共通の論点として捉えている。
- 8 章炳麟の進化論批判について、すでに拙稿「進化論」から「進化教」へ——章炳麟における進化論批判の思想形成」（『中国哲学研究』第一六号、二〇〇一年七月）があるので、ここでは詳しく言及しない。
- 9 この段落での引用は主に、章炳麟「駁中国用万国新語説」（『民報』第二四号、上海人民出版社編『章太炎全集』第四集所収、上海人民出版社一九八五年）による。
- 10 章炳麟「小学略説」、『国故論衡』第二一三頁。台北：広文書局一九七七年。引用文の中の「武」とは長さの単位であり、約三尺である。
- 11 前掲李石曾「進化と革命」。
- 12 これについて、すでに拙論『アイデンティティの危機——清末国学研究』（東京大学博士論文、二〇〇三年）があるので、こ

ここでは詳しく言及しない。

- 13 章炳麟「規『新世紀』」、「民報」第二四号、第五五頁。
- 14 前掲章炳麟「規『新世紀』」。
- 15 章炳麟「与人書」、湯志鈞「章太炎年譜長編」（北京：中華書局一九七九年）第三〇五頁。それは『新世紀』第一一八号（一九一〇年二月）に掲載されたものであるが、『章太炎全集』に収録されていない。
- 16 前掲「規『新世紀』」、第五一頁。
- 17 その一部は、今日の中国語にはすでに定着しているといえる。それも清末のエスペラント論争がその後の中国語改革の方向を影響した一例である。
- 18 前掲「駁中国用万国新語説」、前掲『章太炎全集』第四集、第三五一—三五二頁。
- 19 劉師培「論中土文字有益於世界」、「國粹學報」第四六期、一九〇八年一月一日（光緒三十四年九月二十日）。『劉申叔先生遺書』（影印本、華世出版一九三六年、一九七五年再版）第四六冊所収。または李妙根編選『國粹与西化——劉師培文選』第一九三—二九五頁、上海：遠東出版社一九九六年。
- 20 古音の母音について、顧炎武は一〇部、江永は一二部、戴震は九類二五部、段玉裁は一七部、孔広森は一八部、王念孫は二部、夏忻は二二部と分類した。子音については、清朝は錢大昕の研究しか見られない。錢大昕は古代中国語には「輕唇音」と「舌上音」がないと論じた。章炳麟の研究によって、例えば『詩経』のような古典は、調和した音韻で読むことが今日の人でもできるようになった。なお、章炳麟は周音が二一紐二三韻と考証したが、黄侃は一九紐二八韻と断定し、錢玄同は黄侃の説を採用した。それについては、錢玄同「國音演革六講」（『錢玄同文集』第五卷第一九五—一九八頁、中国人民大学出版社一九九九年）と「文字学音篇」（同第四五一—四八頁）参照。

「万国」と「新」の意味を問いかける